

バブル後最安値

東証、終値7162円

26年ぶり 低水準

週明け二十七日の東京株式市場は、金融危機に端を発した世界同時不況の懸念が一段と強まったことや、外国為替市場で

円高が進んだことから売り注文が先行。日経平均株価(225種)は二〇〇三年四月二十八日に付けた、終値基準でのバブル

経済崩壊後の最安値を大きく割り込んだことから売

ル経済崩壊後の最安値を更新、一九八二年十月の水準となった。

米欧各国が金融機関への資本注入などの緊急対策を打ち出してきたが、米経済指標や日米企業の業績の悪化で金融危機が

実体経済に打撃を与えていることが鮮明となり、不安心理が一段と強まった。午前は、前週末の急落の反動による買い戻しで一時上昇に転じ、前週末終値を挟んだ不安定な値動きとなったが、午後には、平均株価の下げ幅が一時五〇〇円を超えた。

世界的な株安連鎖は、個人消費をさらに冷え込ませ、金融機関の貸し渋りを招き、企業の体力を奪う恐れが強い。景気後退色が強まる日本経済は、さらに深刻な状況に追い込まれそうだ。

平均株価は、バブル絶頂だった八九年大納会の十二月二十九日に、終値で三万八九一五円八七銭の史上最高値を付けた。市場では「危機の震源地である米国の景気回復は見通しが立たない。株価低迷は長期間続く可能性がある」(大手証券)と悲観的な見方が強まっている。



バブル経済崩壊後の最安値を大きく割り込んだ東証株価の終値(中央)。世界同時不況が懸念される=27日午後、東京・八重洲

